

2012年度第1回 琵琶湖博物館協議会

日 時 2012年10月30日 (火)

13:30～16:30

場 所 滋賀県立琵琶湖博物館1階 セミナー室

会 議 次 第

1. 開 会
2. 企画展示「ニゴローの大冒険～フナから見た田んぼの生き物のにぎわい～」
等館内の見学
3. 議 事
 - (1) 会長・副会長の選出について
 - (2) 新琵琶湖博物館の創造（リニューアル）について
 - (3) 琵琶湖博物館中長期基本計画2011年度行動計画の実績および
2012年度行動計画について
 - (4) その他
4. 閉 会

[午後 1時32分 開会]

1. 開 会

○司会（兼房副館長）：それでは、定刻になりましたので、本年・平成24年度第1回目でございますが、滋賀県立琵琶湖博物館協議会を開催させていただきます。

お三方が少しおくれるということをお聞きしておりますので、会議を始めさせていただきます。

会議の前にあらかじめお断りをさせていただきたいと思います。当協議会でございますけれども、滋賀県のほうでは、こういった公での会議につきましては公開という形をとってございます。したがって、委員席の後ろに記者席や傍聴席を設けてございます。きょうは、まだお越しいただいてないようでございますけれども、オープンということでございますので、その点、ご理解いただきたいと思います。

会議の定足数でございます。委員総数15名でございますけれども、1名の委員さんは、本日どうしてもご都合が悪いということで、出席予定者14名でございます。3名の方が少しおくれてこられますが、現在11名のご参加をいただいておりますので、会議は成立したということ、まずもってご報告申し上げます。

会議に入ります前に、今回、委員の改選をさせていただきました。本年8月末をもちまして第8期の委員は任期満了となりました。したがって、改選をさせていただきまして、新たに8名の方が今回9期の委員としてご了解を賜りました。

私のほうから、時間の都合もございますので、ご紹介させていただきたいと思います。お手元に会議のレジュメがあらうかと思いますが、そのレジュメの2枚目の左のほうに委員名簿が五十音順で示してございます。右手のほうは、今回の配席図でございます。

まず、今回新たに、小田委員でございます。

2期目をお願いすることになりました、河上委員でございます。

今回新たに、菊池委員でございます。

同じく新たに、北島委員でございます。

3期目をお願いすることになりました、津屋委員でございます。

今回新たに、中田委員でございます。

2期目をお願いすることになりました、西川委員でございます。

今回新たに、橋詰委員でございます。

3期目をお願いすることになりました、伴委員でございます。

今回新たに、前田委員でございます。

3期目をお願いすることになりました、山本委員でございます。

よろしくお願いいたします。

私どものメンバーについても、私のほうからご紹介をさせていただきます。

当館の館長の篠原です。藤岡上席総括研究員です。用田上席総括学芸員です。

高橋上席総括学芸員です。グライダー上席総括学芸員です。八尋研究部長です。

松田事業部長です。

同じくスタッフでございますけれども、向かって左から、村井総務課長です。

展示グループリーダーの芳賀です。今年度より新琵琶湖博物館創造準備室を立ち上げましたが、その室長補佐の廣瀬です。企画調整課長兼準備室長の藤村です。

環境学習センターの加藤です。交流グループリーダーの楠岡です。

資料活用グループリーダーの山川です。それと、県庁琵琶湖環境部環境政策課からお越しいただいております、白井課長補佐です。

以上のメンバーでございます。

申し遅れました。副館長の兼房です。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、レジュメに沿って進めたいと思いますけれども、ここで、篠原館長よりご挨拶を申し上げたいと思います。

○篠原館長：琵琶湖博物館館長の篠原でございます。

今回の博物館協議会は第9期ということになります。新しい方もおられますけれども、この1年間よろしくお願いいたしますと思います。

琵琶湖博物館を、地域に愛され、世界に発信する博物館にできるよう、この協議会の皆さんの意見によって新しい方向を考え、運営していきたいと考えておりますので、十分に議論していただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

新しい方もおられますので、簡単ですけれども、この1年間を振り返ってみますと、平成23年度・昨年度の来館者は37万1,505人ですけれども、1万人ぐらい増えて、5年連続の減少に若干歯どめをかけることができました。7月1日から3日間は、「あさ、ひる、ばん博物館を楽しもう！」と題して、3日間は無料開館、はしかけグループによる「オープンハウス&体験コーナー」や、コンサート、さまざまなことをして入館

していただきました。それから、原発の問題がありましたし、いろいろありますが、「節電クールライフキャンペーン」をやりました、前年の同時期に比べ、17,000人の入館者増となりました。

今年度は、引き続き、「節電クールライフキャンペーン」をやりましたし、「あさ、ひる、ばん」もやっております。博物館が一丸となつていろいろなことをやっておりますけれども、もう10月で16年が経過しまして、展示空間、交流空間など新しい試みの魅力がだんだん薄れてきて、いろいろな構造的な問題が出てきて、そこをいろいろ修繕しなくてはならないようなことが起きております。

こうした状況を考え、昨年から開館20周年をめぐりに、いわゆる展示更新、リニューアルをしようということで、先ほど紹介がありましたけれども、準備室を用意して、それに動き始めております。その全体を琵琶湖博物館の創造というふうに言っています。

リニューアルする博物館は考えなくてはならないことがいっぱいありますけど、全体の動きから考えると、「文化の行政化」が「行政の文化化」の時代というような時代にだんだん変わってこようとしております。私自身は、公共的なこういう施設、生活に近い地域の施設は、多様な住民の多様な要求に対応できるような、柔軟な多機能空間として機能すべきだというふうに思いますし、琵琶湖博物館は広域圏をカバーする施設というのを今後考えていきたいと。より機能的に特化した高度なサービスが今後できるように、高度な奉仕サービス機能を持つ博物館としてリニューアルを図りたいというふうに考えているのが、現在のこの博物館の立ち位置であろうかというふうに思っております。

博物館を取り巻く状況は大変厳しいものがありますけれども、皆様の真剣な議論、あるいはご声援を賜わることが協議会の使命であると思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

○兼房副館長：では、レジュメの2番目に、企画展示をごらんいただく予定になってございますが、半分以上の委員さんがおかわりになっておりまして、したがひまして、ごくごく簡単ではございますけれども、お手元の資料の「要覧」という冊子があるかと思ひますけれども、その一部を紹介させていただいて、その上で、企画展のほうをご覧いただきたいというふうに思ひます。

(「要覧」の説明、約10分間記録省略)

企画展示を開催しております。5月から11月25日まででございますけれども、いわゆる博物館法では、博物館はこの企画展を年1回やるということに義務づけられております。今年度は、「ニゴローの大冒険」という形で開催しております。担当の学芸員が案内させていただきますので、ごらんいただきたいと思っておりますし、もし時間がございましたら、とりわけ初めてご出席の委員におかれましては、他の展示も見ていただければ幸いです。

では、担当の者がご案内しますので、ご準備をよろしくお願いいたします。

なお、議事につきましては2時半から始めさせていただきたいと思っておりますので、2時半少し前ぐらいには、この席にお戻りいただければと思います。よろしくお願いいたします。

[午後 1時57分 休憩]

- 2 企画展示「ニゴローの大冒険～フナから見た田んぼの生き物のにぎわい～」等館内の見学

[午後 2時40分 再開]

3 議 事

(1) 会長・副会長の選出について

○司会（兼房副館長）：それでは、再開をさせていただきます。

先ほどの紹介に続いて、その後おいでになりました委員を、改めてご紹介させていただきます。

市川委員でございます。

廣畑委員でございます。

松江委員でございます。

それでは、議事のほうに入らせていただきます。

(1) 会長・副会長の選出についてということです。冒頭にも申し上げましたとおり、委員改選によりまして、会長・副会長がまだ決まっておりません。その間、私のほうで司会を務めさせていただきます。

琵琶湖博物館の設置・管理条例の中で、会議につきましては、会長並びに副会長ともに、委員の互選ということになってございます。手を挙げていただければありがたいでございますけれども、なかなか難しゅうございますので、こういった形でさせていただけるのかなと思っておりますが、いかがでしょうか。

(「事務局に一任」の声あり)

○司会(兼房副館長)：ありがとうございます。

「事務局一任」のお言葉をいただきましたので、僭越でございますけども、事務局の案を提示させていただきたいと思います。

会長さんには、姫路市立水族館館長の市川委員にお願いをしたいと思います。

副会長には、前期8期まで副会長をお願いいたしました西川委員さんに、引き続き、お願いをしたいと思います。いかがでございましょうか。

よろしゅうございますか。

(「異議なし」の声あり)

○司会(兼房副館長)：ありがとうございます。

それでは、会長・副会長、よろしくお願ひしたいと思います。

どうかお席のほうにお着きいただきたいと思ひます。

では、会則に則りまして、司会を会長さんにバトンタッチをさせていただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

○市川議長：市川でございます。風邪を引いてしまひまして、せきが出始めると止まらない状況に陥るんです。見苦しいところが出るかもしれませんが、よろしくお願ひします。

皆様のご推薦をいただきましたので、会長として、以後の議事の進行をさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

(2) 新琵琶湖博物館の創造(リニューアル)について

○市川議長：それでは、2番目の議事に入らせていただきます。

新琵琶湖博物館の創造について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局(藤村企画調整課長)：藤村と申します。よろしくお願ひいたします。

それでは、座って説明をさせていただきます。

資料のほうは、お手元にA3の大きさの2つ折りの資料がございます。資料1、新琵琶湖博物館創造ビジョン(概要案)、これに基づいてご説明をさせていただきます。

まず、1の基本的な考え方でございます。冒頭、副館長から紹介がありましたが、琵琶湖博物館はその使命として、琵琶湖淀川流域の自然、歴史、暮らしの理解を深め、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いていくこと、こうしたことを

使命としておりまして、右にあります3つの基本理念を掲げて活動を続けてまいりました。

まず1つ目の、基本理念といたしましては、「テーマをもった博物館」です。琵琶湖博物館では、「湖と人間」というテーマのもとに、自然と人の両面から研究・調査を行い、その成果を展示や交流活動に反映をしていくことを目指しています。

2つ目が、「フィールドへの誘いとなる博物館」です。琵琶湖博物館では、魅力的な発見や創造というのは現場のフィールドから生まれるという、そうした理念のもとに、地域での研究活動や交流活動の入り口となる博物館、そうしたことを目指しております。

3つ目が、「交流の場としての博物館」ということで、楽しみながら学び、考え、出会いの場、交流の場となる、そうした博物館を目指しております。

そして、琵琶湖博物館の使命を全うするために、この3つの基本理念を総合的に発展させた新しい博物館像として、「地域だれでも・どこでも博物館」の実現ということの中長期目標といたしまして、地域の人びとと力を合わせて、それぞれの地域が博物館と呼べるような、そうしたネットワークの広がりを目指しているところでございます。

こうした使命、基本理念、そして中長期目標が琵琶湖博物館活動の根幹となっているものでして、また琵琶湖博物館が社会の期待に応えるためにも、いまだ有効な指針となるものと考えておりまして、この使命、基本理念、中長期目標を新琵琶湖博物館創造ビジョンにおいても継承をすることとしております。

しかしながら、現在の博物館を取り巻く状況や社会環境は、開館当初とは大きく変化をしてきております。このような中で、社会の期待の一步先を行く博物館として今後も成長するためには、これまでの評価や課題、社会の要請を踏まえまして、「湖と人間」の新しい共存のあり方を提示する展示交流空間の再構築が必要だというように考えております。

新琵琶湖博物館の創造を通じまして、琵琶湖・淀川流域から「湖と人間」を考え、関西圏をリードする環境学習・情報発信の拠点となること、さらには地域に根差しながら、広く世界を視野に入れて研究・交流のネットワーク施設となることも目指したいというように考えております。

中を開けていただきまして、次に、2の琵琶湖博物館を取り巻く状況の変化です。

(1) 評価と現状。琵琶湖博物館の来館者数ですが、おかげさまで、ことしの6月に

は800万人を達成しました。交流・サービス事業を重視する琵琶湖博物館では、年間200回以上の観察会や体験教室などを開催しております。また、博物館の根幹となります資料の収集・整備では、累計85万点の資料が収集され、45万点が整理登録をされてきました。そして、資料のデータベースを17分野で、また電子図鑑を8分野でインターネット公開をしているところです。琵琶湖博物館が交流の場としての博物館という理念のもと、そして「地域だれでも・どこでも博物館」の実現に向けて、県内外の多くの方と共同で研究を行い、博物館だけでなく、それぞれの地域でも展示をつくり、交流を深める事業を展開してきました。

こうした地域に根差した活動が深まり、広がりを見せる一方で、平成12年に52万人だった年間来館者数が、昨年度は37万人と年々減少をしております。来館者の構造分析の結果、学校・団体等子どもを含む家族連れが安定をしているのに対しまして、大人の利用者が大幅に減っているという、そうしたことが明らかになりました。このことは、大人が繰り返し利用する生涯学習施設としての機能が、いまだ十分ではないということを示していると考えております。

次に、(2)の社会情勢の変化ですが、少子高齢化が進展をしております。今後、これまでのような学校利用というのは減少していくのではないかとということが想定をされます。また、成長を追い求めていた時代から、生活の質や心の豊かさを求める、いわゆる成熟の時代へと転換をしております。博物館もそうした社会の変化に対応していく必要があると考えております。また、この間、環境に対する考え方や価値観が多様化し、生物多様性や持続可能社会といった新しい環境観が社会的に認知をされるようになり、外来生物の侵入増加など、これまでになかった環境問題が顕在化しております。さらに、低炭素社会の実現など、開館当初にはなかった社会的な動きが活発化をしております。環境保全における広域的な取り組みの必要性も認識されるようになりました。

しかしながら、(3)の課題にありますように、琵琶湖博物館では調査・研究が進展し、多くの資料が収集をされてきましたが、これまで大規模な展示更新はできておりません。こうした成果が展示に活用されていない現状がございます。また、環境に対する考え方の変化や、新たな環境課題に対する展示更新がされていないということで、常設展示の情報発信力が低下しているといったことは否めないかなというように感じています。大人の利用者が減少していると申し上げましたが、やはりレファレンス機能が十

分ではないという、そうした面もあります。また、多様な人びとを受け入れるユニバーサルデザイン化も、いまだ十分ではないというのが現状でございます。

琵琶湖博物館の開館以来、このように博物館を取り巻く状況は大きく変化をしてきました。近年のこうした社会状態の変化は、高度化・複雑化をした情報を容易に学べる場を必要としていると考えています。琵琶湖博物館は、この社会的要請に応えるために、展示や交流のあり方を見直していく必要があります。

こうしたことから、新琵琶湖博物館創造ビジョンの3のところに書いておりますが、「湖と人間」の展示交流空間の再構築を行うこととしておりまして、そのコンセプトとなるのが、①高度化・複雑化した情報をわかりやすく、タイムリーに伝える博物館と、②大人が日常的に学習の場として利用できる博物館、この2つでございます。

そして、中心となる項目といたしましては、右のほうに広がっておりますが、常設展示の再構築、交流空間の再構築、交流機能の強化、利用者の立場に立った施設整備・運営の確保の4つでございます。

まず、(2)の常設展示の再構築では、その方向性として、現在の展示の良さを生かしつつ、常設展示の発信力を強化していくということで考えております。これまで収集されてきました実物資料を生かし、中規模での展示更新が可能な展示空間としていきたいと思っております。「湖と人間」のこれからの関わりを利用者と一緒に考えていくためには、自分たちの日常との関わりを感じることができる展示が必要になってくると思っております。近年の環境変化ばかりではなく、長い時間かかって起こったことや遠い過去に起こったことも、自分たちの日常と実は関係しているんだということがわかる展示に再構成したいと考えています。また、最近の研究成果、そうしたものを展示に反映をしていきたいということと、地域の人びとが調査をし、収集した貴重な資料、これを紹介できるような、いわゆる市民がつくる展示室のようなものを実現したいと思っております。

具体的には、現在ある4つの展示ゾーン、これは維持をすることとします。

A展示室は、「琵琶湖と生き物のおいたち」をテーマに、現在の入り口といたしまして、長い時間規模で起こる変化を紹介いたします。今の琵琶湖の地理的風景や生物が非常に長い時間をかけて変化をしてきております。その途中には、今はいない生物の出現・絶滅などがありますし、また気候の変化や、それに応じた生物の拡散・縮小、地形の変

化などを、この展示室では扱うこととなります。A展示室は、現在と過去のつながりを知る展示空間と、こういう位置づけを現在ではしております。

B展示室では、「身近な自然と人びとのくらしの歴史」をテーマに、これもまた現在を入り口とした数千年から1000年程度の規模で起こった自然の変化と、社会やくらしの変化をあわせて紹介をしていくということとなります。琵琶湖を中心とした人と自然の歴史、「湖と人間」のこれまでの関わりを振り返る展示空間となります。

C展示室は、「近年の環境と人の活動」をテーマに、高度経済成長以降に起こった環境変化であり、新たな課題、そしてくらしと湖の関わりの変化、そうしたことを多様な視点から紹介をいたします。「湖と人間」の今後のあり方を考える展示空間となります。

次に、(3)の交流空間の再構築ですが、その方向性といたしまして、参画と発見、対話と交流を促す交流空間の構築を目指すということとしております。博物館の楽しさが伝わり、新たな活動の場となる交流空間や琵琶湖に隣接する立地を生かした屋外交流空間を整備していきたいと思っております。

まず、大人が繰り返し利用する生涯学習施設としての機能を強化していくために、大人のディスカバリールームというものを新設したいと思っております。これは右に、オーストラリア博物館の写真と絵が載っておりますが、この大人のディスカバリールームは、標本や剥製、資料を備えたコレクションルームでございまして、来館者が自由に触れ、観察することができる空間です。また、一部をガラス張りにしまして、博物館スタッフの活動も見学でき、かつ交流もできる空間ということを考えております。

また、情報通信技術を活用した情報化の推進、体験型交流空間を整備し、昔の道具の使用体験やサイエンスカフェなど、過去を理解し、新しい発見ができる学びの場を充実していきます。

さらに、地元食材や特産品を楽しめるレストラン、魅力的なショップなど、博物館の価値を高めるいわゆるアミューズメント機能、そうしたものも強化をしていきます。

(4)の交流機能の強化といたしましては、環境学習機能を強化するとともに、お隣にあります国際湖沼環境委員会(I L E C)と連携をいたしまして、国際的なネットワークを拡大していきます。博物館の自主活動グループであるはしかげやフィールドレポーターなど、博物館の高度利用者への制度の充実や、地域支援の新たな展開も検討していきます。

また、琵琶湖博物館の国際交流機能を強化し、国際的ネットワークを活用し、展示の国際化にも努めてまいりたいと思っています。

最後に、（５）利用者の立場に立った施設整備・運営の確保としては、一層のユニバーサルデザイン化の推進、省エネ化や情報機器の更新など、施設・設備の改修、企業との連携を構築して外部資金の導入を図るなど、経営の効率化に努めていきたいというように思っております。

では、裏面を見ていただきたいと思います。

４の期待される効果です。こうした展示交流空間の再構築を通じまして、過去から学び、現在を見直し、未来を新たな視点で考える総合的な理解が進みまして、琵琶湖の大切さに気づき、地域を誇りに思う人びとが増えるということを期待しております。また、レファレンス機能や交流機能の充実によりまして、博物館の高度利用が促進をされ、新たな交流活動が生まれ、フィールドからの発見や創造が広がっていくということも期待しております。交流などの再構築により、くらしの中に博物館が定着をして、結果として、来館者の増加にもつながるのではないかとというふうに考えています。さらに、滋賀県、琵琶湖、そして琵琶湖博物館の発信力が高まり、琵琶湖地域の認知度が向上することも期待しております。

リニューアルを通じまして、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いていくという博物館の使命を達成していきたいと考えています。

こちらに絵が描かれております。樹木図といっておりますが、博物館に例えてみますと、大きな木だということです。木が広げた根から養分や水分を吸収するように、博物館は研究・調査、資料を集めて、その成果が幹に蓄えられて枝葉に送られ、そして果実が実ります。利用者はその果実を利用し、その種が地域に広がり、また新芽が芽生え、成長し、やがて大きな森になっていく。いわゆる「地域だれでも・どこでも博物館」の姿をこの絵はあらわしております。そして、その活動は滋賀県だけにとどまることなく、京都、大阪、兵庫といった琵琶湖淀川流域に広がり、関西をリードする環境学習・情報発信の拠点となることをこの絵でイメージしております。

最後に、ビジョン策定による目標年次についてですが、本年度、新琵琶湖博物館創造ビジョンを策定し、平成34年度までの10年間で、計画的、段階的に取り組んでいきたいというように考えています。まずは開館20周年に当たる平成28年度を目途に、

第1期の取り組みを進めていきたいというふうに考えております。

以上でございます。

○市川議長：ありがとうございました。

それでは、議題2、新琵琶湖博物館の創造について、議論を進めてまいりたいと思います。

ご意見、ご質問、どなたからでも結構ですので、よろしく願いいたします。

どんなことでも結構ですので、何かございませんか。

伴委員、お願いします。

○伴委員：大変すばらしい内容だと思うんですけども、2点ほどお伺いしたいんです。

インターネットで電子図鑑をつくっておられるということで、それから、これからはICTの環境を整えるというような構想だと思うんですけども、昨今、インターネットがこれだけ発達して、いわゆるインターネットミュージアムというものをもっと使いやすい形に構築するということが入っていないのは、なぜということですか。

もう一つは、この博物館の最も弱いところは来館者のここへのアクセスの悪さなんですけれども、それに対するここでの時期、新しい博物館構想の中にそれが入っていないのは、なぜかということについてお伺いしたいんです。

○事務局（藤村課長）：はい、お答えいたします。

まず、インターネットミュージアムの構想でございますが、今回は資料を整備・分類をし、現在まで電子図鑑等を整備しておりますが、そうした方向性は今後とも維持をしていきたいなというように思っております。ただ、今回、実物資料を中心とした展示ということで、力を入れておまして、双方の面でこうしたことが進められればなというふうに思っております。

もう一つ、アクセスの悪さですが、実はこれは内部でも検討をしておまして、私たちも課題であると思っております。ただ、これにつきましてはバス会社等との交渉もあり、また館として、そうした体制を整備していくということが議論として今後出てくると思っておりますが、この概要案の段階では、まだ具体的に、こうした方向性で行くということが出ていない状態でしたので、ここには挙がってはおりませんが、アクセスの悪さ、そして駐車場がこちらの博物館に来る道のりも結構遠いという、そうした苦情も伺っておりますので、そうしたことも含めて、利用者の立場に立った施設・

整備ということは今後検討していきたいというふうに思っております。

○市川議長：よろしいですか。

ほかに、何かご意見ございますでしょうか。

○小田委員：今、アクセスの悪さというお話が出ていたんですけども、確かにここへ来るのに当たって、恐らく車がある方しか来られないなと私なんかは考えます。場所の悪さでは、福井県に恐竜博物館というのがあるんですが、あそこはここよりもっと悪いです、市街地から1時間以上車で走らないと行けない。でも、あそこは、結構人が来ておられる。博物館全てそうだと思うんですけども、集客のよさということを問題に掲げておられるんですが、あそこには魅力的なことがもう一つあるんです。先ほどインターネットの話が出ていましたけども、確かにそういったウェブ上での資料を閲覧できるシステムというのは面白いと思うんですけども、そこで終わっちゃうなという懸念があります。恐竜博物館も非常におもしろいウェブの資料に出るわけです。でも、見た後で実物を見たくなるんです。

じゃ、こちらの博物館はどうだろう。昨日も見えておりましたけども、魚の写真があって、説明が書いたりしている。でもそれで終わってしまうような気がするんですよ。だから、インターネットの話もそうですし、集客のこともそうですが、やはり人をどうやってここに持ってくるかということが一番大きい問題じゃないかなと思うんです。下世話な話ですけど、お金がなければ何もできないなど。集客してゆくことを考えていきたいと思っています。

移動博物館をされていると思うんですが、最近、私もどこかで見ましたけども、あれも面白いと思うんですが、ああいった集客のための活動というのは、どのようにされているのでしょうか。ちょっとそれをお聞かせいただきたいんですけど。

○兼房副館長：集客のための活動でございますけど、もとより私どもの博物館の活動は種々取り組んでおりまして、観察会、講義・講座等々の学習会、体験学習、いろいろ取り組んでおりますけども、直近で言いますと、新たに23年度からの取り組みが3つございます。

1つは、「あさ、ひる、ばん博物館を楽しもう!」という3日間のイベントでございますけれども、通常なかなか来ていただけない層、つまり働いておられて昼間に来られない、土・日も忙しいという方もおられるわけですので、夜間に博物館を開放して、9

時までですけれども、その間に来ていただいて、新しい気づきをしてもらう、魅力を感じていただくということとしまして、そのためにはいろいろとイベントの中でコンサートを開き、あるいは冒頭申し上げました、フィールドレポーター、はしかけさんの取り組みについて紹介、案内をさせていただいて魅力を感じていただく場をつくる。こういったことを新たに、3日間ではございますけれども取り組んでございます。

23年度は7月1日・2日、3日、金・土・日とやりまして、2万2,000人を超える集客がございました。通常の5倍近くの人が入ってございます。ことしは、実は節電の関係もございましたので、10月19日・20日・21日、これも金・土・日でございますけれども、地場産の食を楽しんでいただくということも取り入れまして開催をさせていただきました。夏休みではないということもございましたので、昨年並みではございませんでしたけれども、それでも通常の2.5倍以上のお客様がお見えになりました。そのことによりまして、新たな層の開拓に努めてきているというのが一つです。

それと、委員が先ほどおっしゃっていただきました移動博物館でございます。22年度に1,700万円をかけまして、いわゆるミニ博物館のモニュメントであったり、レプリカであったり、いろんなものをつくりまして、それを集客施設、例えば大規模小売店とかイベントの会場にそれを持っていきまして、お客さんに見ていただく。ことしも何回もやっておりますけど、とりわけ移動博物館につきましては、県外の方に琵琶湖を紹介していこう、博物館を紹介していこう、県外から来ていただくチャンスにするということで、主に移動博物館は県外を対象にしております。ことしも東京、大阪、兵庫等々でやっております。しばらく何回かはやっていこうというふうに考えます。

2点だけとりあえず申し上げますが、そういった新たな取り組みもしてきているところでございます。

○篠原館長：今のは、琵琶湖博物館だけで努力していることですが、もう一つ私自身、長期的に少し考えているのは、滋賀県全体に大学コンソーシアムというのがありますけれども、大学における博物館利用というのをどんどんしていただくということで、今、事務局レベルで私自身も入って、大学の博物館利用をどうするかということを投げかけております。

御存じのように、ここは立命館大学も龍谷大学もあって、滋賀大学もあって、県立大学もあって、随分多くの学生がいますけれども、これは大人のディスカバリールーム云々

かんぬんがありますけども、それに入れていきますけども、高校生、大学生の利用というのは、全国的ですけど物すごく少ないわけですよね。大学生になると来なくなると。

しかし、これだけ大学生が一杯いるにもかかわらず、どうして来ないのかなということで、それは大学コンソーシアムのほうに問題を投げかけて、大学教育の一環の中に博物館を入れてほしいと、ぜひ踏み込んでほしいということをお願いしております。成功すればですが、それは不確定な要素なので入れていません。

それから、先ほど駐車場のことを言いましたけども、これは前からずっと協議会で指摘されていて、これは悪循環を起こしていて、入館者が少なくなるとバスがなくなるとかいろいろあって、根本的にやらなくちゃいけないんです。これはリニューアルの中に入れるというようなことではなくて、日常的にやらなくちゃいけない話ですけども、実際にはこの4月からバスが少なくなり、草津市とも、私自身が市長と話しましたが、なかなかうまくいかないんですよね。

ですから、博物館、美術館を含めての、滋賀県の博物館全体をもう少し活性化するような方向で考えていかないといけないというふうに思っております。ここは滋賀県博物館協議会の中心的な施設でもあるんですから、そのほうも少し考えながら、滋賀県の博物館・美術館・資料館等をもっと活性化するような方向に、いろいろな形で働きかけていきたいというふうに思っております。

○兼房副館長：先程の3点のうちのもう1点ですが。昨年度からご承知のように、節電の関係でクーラーキャンペーンというのを、これは私どもだけではありません。県立のいくつかの施設を無料で開放し、お越しいただくというのですが、そういった機会をとらえて、新たな層の方たちの開拓にも役立つんじゃないかなというふうに思っております。

少し補足させていただきたいんですけど、例えばアクセスの問題ですが、たくさん、私ども長いことアンケートをやってまいりまして、課題としていただいております。本当に大きいことから小さいことから、様々でございます。

今回、説明させていただきましたのは、ビジョンでございまして、今年度中に構想を構築させていただきまして、来年度以降に基本計画でもう一步踏み込んだ形で議論をさせていただきたい。その際には、詳細にわたったいろんな課題解決に向けた方策を議論させていただきたいと、このように思っています。

○市川議長：交通網の発達した大都会の博物館と違って、地方の博物館はどこへ行っても、そんなにアクセスのいいところがありません。じゃ、どうするかと。それでも、おもしろければお客さんは来るはずです。要は博物館の中身の問題で、私のところ、そんなに交通アクセスは悪くないんですが、お客さんが9割ぐらいは車で来られます。今はそういう時代なんだろうなと。

そういう時代だということで、アクセスがどうこうという話じゃなくて、やっぱりどうやったらおもしろくなるのかという話を進めていかないと、この場はおもしろくならないじゃないか。

何かご意見ありますでしょうか。

○西川副会長：入場者数を見ても、個人の入場者数は増えている傾向なんですね。一般と
いうことで言いますと、やっぱり団体が、どかっと落ちている。しかし、個人の一般なんかはじわじわ回復してきている。考えてみると、一般の人が個人で来るというのは、すごいことだと思うんですね。だから、そこはもっと評価してもいいんじゃないかと。

だから、入場者数について言うと、団体の数がざっと減ってしまっているのに対して、
どういう対策をとられているのかなというのをちょっとお伺いしたいんです。

○兼房副館長：一番の博物館の特徴というのは、お子さん連れで、もちろんシーズンということもあるんですけども、たくさんの方が見ていただいています。それと、開館当時は物珍しさも手伝いまして、最高97万人を超えている時期もございましたけれども、安定時期に入りますと50万そこそこございました。それから徐々に減っていく、その主な原因は委員おっしゃいました、やはり一般団体の減少が著しいということでございます。これではということで、実は23年度からでございますけれども、県内には、各種団体がございます。婦人会もございますし、老人会もございますし、あるいは地元の自治会等々の団体もございます。

そういったところに、できるだけご紹介させていただきたいということで、その団体連合会等々を通じまして、総会等、あるいは会議に私どものほうから出かけていまして、いろんな催し事について案内をさせていただくという活動をやっているところでございます。

○市川議長：ほかに何かございますか。

どうぞ。

○津屋委員：中期計画のキーワードというか、「地域だれでも・どこでも博物館」というのは、私が滋賀県に来てから、この点をずっとインプットされてきたんですけども、そういった中で、一定博物館としてこういう大変な成果がありますという姿も出てきていると思うんです。

そういった中で、新たな博物館構想になって、非常に期待されているというか、琵琶湖博物館が、他府県の博物館やボランティア制度とかに投げかけるとか、非常に課題でありまして、そこを見習って、いろいろな制度が非常に大きく転換してきた部分があります。次は、琵琶湖博物館は何するんだろうというので、すごく期待をもって見られていると思うんです。

先ほどから、入館者数という部分の、評価ですね。狙うところは、「地域だれでも・どこでも」であって、自分たちの生活の中の博物館づくりというようなテーマを持ちながら、博物館にどれだけ来るかというところだけが、もし評価の指標だとすると、それは厳しいなというふうに思っています。前回も何かこんな話が出たように思うんですけど、入館者数というのか、利用者数というのか、さらにはもっと新たな表現というか、要は博物館で日々つながって活動している人たちという数字も出してきたら、琵琶湖博物館らしい数字が出てくるんじゃないかなと。

いわゆる目的が、琵琶湖博物館の場合、「どこでも」という、ここで学んだことを自分の生活、フィールドで生かしてくださいという、そういった方向性を指し示していますので、入館者数だけを追い求めていくというあたり、そうじゃないすごい数字が隠れているように思いますので、そういったところを琵琶湖博物館の個性として出されたらどうかというふうに思います。

あと、先日の「あさ、ひる、ばん」が大人気で、会議ごとにこの成果のお話が出るんですけど、今回、異種とのコラボレーションというんですか、音楽会をやったり、より楽しい空間づくりをされたり、チラシをうちの子どもが学校でもらってきましたので、多分、県内の子どもに全部配られているのかなと思うんですけども、このプランの中に、もっと博物館の空間の中で異種とのコラボレーションというんですか、そういった新たな姿を見せていこうというようなところも入ってくると、新しさが出るかと思いました。

この中で、何だ、これと思ったのは、大人のディスカバリールームというのは非常に印象深いですけど、あとはどう変わるのか、いま一つ見えない、何かおとなしいような

ものに感じました。

あとは、交流をする場というのは、どうしても環境学習センターの中に事務所が入ってしまっていますので、やっぱり外に出てきて、いつでもどうぞという立ち寄りやすい交流の場をつくっていただきたいなと思います。高度利用者という言葉が何度か出てきて、高度利用者ってどういう意味だろうというところで、ご回答いただきたいんです。

既にやっている方のところに新しい人が入っていくというのは非常に行きづらくて、近寄りがたいものにならず、より近寄りやすい広がり、新たなファンを増やすというところの部分がここの中に見えにくいので、多分そこは思っているとは思いますが、それがリピーターで数字が増えて、くらしの中の博物館という成果につながるのかなと思うので、そのあたりの特出しをすとか、こういう部分はもっと強化していただきたいなというふうに思います。

高度利用者というのを、簡単をお願いします。

○事務局（藤村課長）：高度利用者の言葉遣いですが、確かに私どもも議論をしている中で、ちょっとわかりにくいというような形で意見は出ております。今現在、はしかけさんやフィールドレポーターのように、博物館を活用して、活動をしていただく人というようなイメージを持っているんです。

実は、ここの大人のディスカバリーの施設なんかでは、近寄りがたいという雰囲気ではなくて、むしろそうした活動を見ていただいて、これだったら僕たちもしたいという、そういう活動の広がりが出る出会いと交流の場という、そういうイメージで広げていきたいというように思っております。

そうした部分が、この表現では見えにくかったという部分があると思いますので、この辺は、また検討させていただきたいと思っております。

○市川議長：いいですか。

ほかに何かございますか。

はい、どうぞ。

○菊池委員：今のご意見にも関係する点があると思うんですけど、来館者当たりの滞在時間というのを調べになったことはありますか。

先ほどの交通アクセスが悪いというのが、どうなっているかというときに、魅力的な施設に家族連れで来て、一日滞在したいというような仕掛けがあれば、恐らくそれは交

通のアクセスの悪さもプラスに働く部分もあると思うんですけれども、先ほど企画展示を拝見させていただいても、決められた時間内で子どもがだあっと走って、時間が終われば帰っていくというような来館者が多いのであれば、それは博物館として伝えたいこともなかなかじっくりとは伝わらないと。

逆に、私自身が琵琶湖博物館に来て思うのは、展示はすごく魅力的なんですけど、一つの展示を見て疲れたときに休む場所がないなど、いつも思うんですね。なので、その緩急をうまく一日使い分けられるような空間と展示内容の配置ということをちょっと工夫されると、恐らく子ども連れだったり、あるいは学術研究に興味があったりというような層も、うまくキャッチできるような仕掛けというものが見えてくるのではないかと思います。

そういったところを少し意識されてつくられると、いろいろおもしろいことができるのではないかなと思って、お聞きしていました。

○事務局（藤村課長）：ありがとうございます。

来館者の滞在時間につきましては、年に3回、来館者アンケートを実施しております、その中で調査をしております。お手元の青の琵琶湖博物館年報の95ページに棒グラフがありますが、そこに滞在時間というものがございます。

中心的には1～3時間という、そうした時間規模になっておりますので、今後この展示のリニューアルを通じて、これをどういうふうな形にもっていくか。あるいは、これをベースとして、どういう展示構成をしていくかということは考えていきたいというように思っております。

○市川議長：いいですか。

そしたら、会長がとんでもないことを言うかもしれませんが、10分ぐらいでお話しします。

私のところの水族館は小さな水族館ですけど、滞在時間では多分日本で1番、2番の水族館だと思うんです。レストランも何もありません。お弁当を持ってきて、10時から3時まで、一日遊んで帰ってくださいという水族館です。去年、リニューアルしたんですが、リニューアル前に、当然こういうような会議を開きます。

そういうときに、市民が、住民がどんな水族館を望んでいるか、どんなものを求めているのかという話が必ず出てくるんですが、今それが一番危ない。テレビで見た、どこ

どこの水族館の何々、雑誌で見た、どこどこの水族館の何々、あれも見たい、これも見たいという意見が続出します。ですから、そのとおりにやると、ことし「京都」と「すみだ」にオリックスの新しい水族館ができましたが、同じような水族館です。あのようになってしまうのです。今、日本中に同じような水族館が次々できています。

要するに、テレビで見た、あれも見たい、これも見たいという要望の実現です。イルカがいて、ペンギンがいて、海水性の熱帯魚がいて、あと、癒してくれる何かちっちゃいものがいれば、大都会の水族館だったら、それだけで十分営業が成り立つんです。しかし、当館がリニューアルするに当たって、そういう水族館にはしたくなかった。だったら、（市民の要望にそのまま応えるのではなくて）自分たちが展示したいものを展示しようという方針で、新しい水族館をつくりました。一体どんな水族館になったのでしょうか。

日本の水族館は100年間、珍しいものを追いかけてきましたが、珍しいものはもうやめようと。外国の珍しいものは要らない。今、メダカやドジョウのほうが珍しいのだったら、それを展示していこうという水族館にいたしました。それだけではお客さんはなかなか来てくれないので、体験型の装置を山ほどつくりました。ですから、いろんなものを触っていると3時間がすぐたってしまうのです。

それから、以前から大型のタッチプールという、ヒトデやウニが入っている水槽があるんですが、そこを見ていると、おじいさんが孫を連れてきて、入り口から入ると、真っすぐにその水槽に行って、孫がそこで2時間ほど遊んで、おじいさんが孫を連れて、そのまま帰ってしまう。でも、そういうお客さんが一番のリピーターなんですね、そういうお客さんが。その子どもは毎月来ます、おじいさんを連れて。

リニューアルで屋上に、ジャブジャブ小川という魚が泳いでいる池みたいな、川みたいなものをつくりました。リニューアルオープンして3日目ぐらいに、お母さんが子どもを連れてきて、ジャブジャブ小川はどこですかと入り口で聞いていました。お母さん方にロコミで広がっていて、真っすぐにジャブジャブ小川に行って、2時間ほど遊んでその親子は帰りました。我々が意図したものとは全然違うんですが、そういう使われ方もあってもいいのかなという気がしています。要するに、今までのこうすれば水族館は当たるんだというのを一切忘れて、一から考えました。

これは博物館でも同じだと思うんです。私たちは、過去のいろんな資料を掘り起こし

て、それを大切に未来に届けるのが博物館の使命だというふうに習ってきました。確かにそれは大事なことなんですけど、一回忘れてもいいじゃないかと思います。琵琶湖の歴史は長いです。何百万年の歴史です。でも、その数百万年の歴史でできたものがここ50年の間に生き物を含めて随分変わってしまいました。200年前からの100年間、100年前からの50年間、50年前からの今、時計の針がどんどんと速く進んでいます。これから10年後、20年後には、多分その前の50年間より、もっと大きな変化が来るかもしれない。そうだったら、博物館もそういう時代の変化に対応しなければいけません。

博物館が市民に求められていることにこだわったためでしょうか、日本の自然系の博物館は展示手法が、どこもよく似てしまいました。よく見るとローカル性がありますから、生き物も、トンボの種類とか違うんですが、何も知らない者がばあっと通ると、同じように感じると思います。だから、今までの「博物館というものはこういうものだ」というのを一回全部忘れて、新しいものを何か考えたらいいんじゃないかと思います。

例えば、温暖化の問題があります。市民のなかには、雪が降らなくなっていいじゃないか。北海道でもお米がとれるようになったら、いいじゃないか程度に考えている人がたくさんいます。ところが、京都議定書はもう守れないという状況の中で、今世紀末には2度上がるということは、もうクリアできない。平均気温が2度上がるのが30年後か50年後かわかりませんが、確実に100年待たない間に上がってきます。

そうしたら、何が起こるのか。当然、このあたりは雪が降らなくなる、琵琶湖に水が入ってこなくなる。それから、冬が冷えなくなれば、水温躍層がなくなりません、湖水の循環が起きないから、琵琶湖の水底の貧酸素層がさらにひどくなるわけです。だから、温暖化で気温が2度上がったら、琵琶湖はどうなるのかというのを、やっぱりビジョンとして、こうなるんだよと。あなたたちの生活はどうなると、これをきちんと説明できるようなものをつくれれば、あっ、ここはよその博物館と違うなという話になります。

それから、敦賀の原発で福島と同じようなことが起きたら、どうなるでしょうか。琵琶湖の魚は誰も食べられなくなります。この辺の田んぼでとれたお米もだれも食べられなくなる。そういうことをきちんと伝えるのも博物館や科学館の役目じゃないのか。だから、自然系の博物館はこうあるべきだ、こうだという今までのイメージを全く壊して、新しいものをつくってもよいと思います。

水槽展示の話ですが、今まで水槽というのは、ガラスの向こうにきれいな魚がいてという、そういうものだと思われていましたが、そうじゃなくて、家のセットの中に「かばた」のような水槽があって、お米を洗っている人間（人形）がいて、そこにコイがいると。そういう水槽をつくってもいいわけだし、例えばゆりかご水田みたいなもの、水田魚道みたいなものをつくって、こうやったらフナが上れるんだよ、ドジョウも上れるんだよという水槽をつくってもいい。夜の田んぼで、動き回っているナマズは誰も見たことがないです。夜の田んぼの水槽をつくってみてもいい。

だから、ガラスがあって中に魚がいてというだけじゃなくて、何か全く新しいことを考えてみたら、おもしろい水族館になる。そういうおもしろい博物館にすれば、お客さんは当然来てくれます。

それから、私、おととしから、すぐ近くの高校生と一緒にトゲナベブタムシという小さな虫を研究しています。絶滅危惧種の虫なのですが、家のすぐそばを流れているコンクリート水路にたくさんいます。それを見つけたとき、何でこんな三面コンクリートの水路に絶滅危惧種がたくさんいるのやろうかと疑問に思いました。それで高校へ乗り込んで行って、自然科学部の顧問の先生と一緒に研究しようと提案しました。それから生徒たちと一緒に研究を続けていますが、ことし、県知事賞をもらって、また子どもたちはやる気になっています。だから、ここで待っているだけじゃなくて、大学や高校へどんどん自分たちが出て行って、交流を進めて欲しい。交流のためにとにかく積極的に出ていく。そういう博物館ができたらいいなと思います。

○西川副会長：関連して、先ほど津屋委員からもお話があったことですが、基本的に常設展示を、水族展示を入れて4つの柱で組んでいくというのは、結局、最終的にはそこに落ち着くことになるかもしれないんですけど、ここまで来る間の、館内の議論で全然違った切り口みたいな、そういう議論がなかったのかというのを、ちょっと教えていただきたいんです。

○事務局（里口学芸員）：展示ワーキンググループを担当しております里口といたします。よろしく申し上げます。

去年度から、この常設展示をどうするかというような議論をしてみいました。建物がこのままかどうか、4つの柱組みはこんなものだろうというようなものは当然あったんですけども、そういうのをなしで一度考えてみましようというようなことから始め

てはおります。

ただ、次の博物館の常設展示というふうに考える中で、「湖と人間」というテーマはこのままいこう。「湖と人間」というテーマの中で、これまで我々がしてきたこととか、いろんな研究テーマとか資料がたくさん集まってきているという現状の中で、どういう展示をつくれればいいのかということを考えたときに、今の常設展示の枠組みというのは非常によくできている。時間スケールというものを大事にしながらも、これをもう一步踏み込んだ形で進めていったほうがいいんじゃないかということで、今、出てきている案があります。

ですから、今の枠組みを大事にしながら、それは多分一番わかりやすい筋道なんだろうということの中で、さらにもっと今までわかってきたこと、複雑化している今の考え方を来館者の方々に知っていただくためにはどうしたらいいのかという議論が、今、挙がってきているものです。

ただ、具体的にどういうものを配置していくかということは、今現在、議論している所ですので、ここにはまだ載せられてはいません。以上です。

○兼房副館長：今ごらんいただいています創造ビジョンの概要案といえますのは、冒頭申し上げましたビジョンの段階、しかも、たたき台ということでありまして、これに対する意見、もちろん当協議会からのご意見を頂戴することとあわせて、県民ワークショップとか、あるいはピアレビューという形で、それぞれご経験のある方たちからご意見を伺う。

こういった手段を今年度中は何回かやりまして、それでこのビジョンとしての肉づけを、もう少ししてまいりたいというふうに考えています。年度末にはそういった意見を踏まえて、このビジョンを作成したいというふうに考えております。

○市川議長：はい、どうぞ。

○前田委員：少しご説明の中にあっただと思いますが、お隣のUNEPとの交渉において、なかなか進まないようなことを聞きましたが、具体的にどのような活用を考えていらして、どのようなところで今おっしゃったのか、教えていただきたいです。

○兼房副館長：UNEPにつきましては、財産の管理関係が私ども博物館と少し異なりまして、本庁の琵琶湖環境部を主体としたところでいろいろ議論を重ねられているようでございます。具体的に、私どものほうはその情報を持ち合わせておりませんので、ちょ

っとコメントできない状況です。

○前田委員：実現的ではないということですか。

○兼房副館長：それも少し、今、何ともお答えのしようがないといえますか、はい。

○前田委員：わかりました。

○市川議長：ほかに、何かございますか。

どうぞ。

○松江委員：松江でございます。

前年度の委員会のほうで少しお話をさせていただいたと思いますが、いろいろと広報、PRに関してもお力を入れておられると思いますが、例えば移動博物館等につきましては、どの程度、県外での対応ができておるのかというところを、ちょっと教えていただきたいです。

一つのアイデアとしまして、前回にも申し上げたと思いますが、県外から、もっと言うなら、滋賀県外から多くのお客さんに来ていただきたいと。あるいは、先ほど会長のお話にもありましたように、琵琶湖という大きな一つのフィールドを考えたときに、ここはやはり関西の大きな一つの水源地である。特に淀川流域にとっては関西の水源地ということを考えますと、今、関西のいろんな広域で取り組みがなされていますけれども、そういった意味で、滋賀県の担う役割というのは大きいんだというふうに思いますので、そういった位置づけからも、少なくとも関西のエリアから琵琶湖博物館にたくさんの方がおいでいただける仕掛けが必要ではないかというふうに考えます。

その辺、いかがでしょうか。

○事務局（藤村課長）：今、移動博物館のお話が出ましたが、琵琶湖淀川流域の人々に対して、琵琶湖と琵琶湖博物館を知っていただくということで、この移動博物館を開発して、本年度から本格的に展開をしているところでございます。大型の集客施設、例えばイオンモールさんなんか、そうしたところで展開をしておりますし、大阪、京都、そして高槻、そうしたところにも出展しておりますし、ことしは東京のほう、「ニッセイの未来フォレスト」ですが、そちらのほうに出展をいたしました。

琵琶湖淀川流域が中心となってきておりますが、今後、東海地方に、第二名神ができてアクセスがよいことも考えられますので、そうしたところも来年度展開をしていきたいなと思っております。

いずれにいたしましても、先ほど申し上げましたように、関西をリードする環境学習、情報発信の拠点としていきたいという、これがリニューアルの一つの目標になっておりますので、この移動博物館を大いに活用させていただきまして、琵琶湖博物館のPRになったり、また新たな客層の掘り起こしとなったりと、大いに展開をしていきたいなどというように思っております。

○篠原館長：今、移動博物館の例が具体的にありましたけども、この博物館のリニューアルの基本的な条件というのを、私のほうから、展示の中身を考えてくださっている人たちに言っているのは、関西広域連合の中で必要不可欠な存在としての博物館になるようにということは言っております。

具体的にどうするのかということは、まだ具体的には出てきませんが、関西広域連合、あるいはもっと政治的な動きがあるかもしれませんけれども、別の動きの中で、ここがどうなろうと、関西地区の中で少なくとも必要な博物館であるような、そういうリニューアルを目指すべきであるというふうに思っています。

それから、さっき里口さんのほうから話が出ましたけれども、私のほうの条件としては、基本的にその研究に基づいた、ここを出発したときには15年前になりますから、そのときのメンバーはもちろんいます。いますけれども、その後に入ってきた人たちがたくさんいるので、その15年間の蓄積を表現できるものというのが、まずは必要だろうと。

そのことの条件としては、我々の研究機関として蓄積してきたこの15年間の新しい知見を出せるような、そういったものが必要であろうということだと、概念的な広域連合の中での必要不可欠な博物館になっていこうではないかと。それがリニューアルのときの基本的な条件としては、私のほうからは要請していることですから、具体的なこともいろいろありますけども、それは今後考えていただくとして、そういう理念でやっというふうなふうに考えるんです。

○松江委員：もう1点だけ、よろしいでしょうか。

今、館長から、関西広域連合云々の話がございました。非常に大事なことです。さっき会長から、原発の問題云々ということで、琵琶湖の汚染の問題だとか、あるいは今の温暖化の問題で、琵琶湖はどうなるんだということについては、地元の滋賀県の人が一番関心があるかもしれないけども、その流域の人たちには十分発信できてないんじゃ

ないかということについては、やはり琵琶湖博物館が中心となって情報発信をしていくということが非常に大事なことだと、私も思います。

さらに、さっきの集客の部分に戻りますけれども、立地条件の中で、当然お車でおいでになるという方はいらっしゃると、ほとんどだということですが、であれば、これも前にもお話ししたかもしれませんが、車ということで考えるならば、例えばその草津の名神のパーキングエリアでの啓発活動をやるとか、あるいは新名神の土山サービスエリアは上り下り一体型で、今、関西のパーキングエリアの中で一番集客があるんじゃないかと言われています。特に最近、中部圏・名古屋方面からもというお話もございまして、アクセスが名古屋、あるいは三重方面からも非常に多いということでございますので、そういった滋賀県内の高速道路、パーキングエリア、サービスエリア等を利用した何かの啓発活動、そこで移動博物館ができれば、さらにもっといいんじゃないかと思えます。

そういった表へ出てやるという仕掛けが絶対必要だと思いますし、滋賀県ではありますけれども、草津市さんともっと何か観光面でのタイアップを考えて、草津においでになる方に、必ずここに足を運んでいただける、そういう仕掛けが草津市の中の一つの形としても捉えなければならぬというふうに考えます。特に、草津は人口が増えておりますし、JRの中でも南草津に新快速がとまるようになって、アクセスがよくなった。また、大学があつて、若い人たちがたくさんいるというところもありますので、その人たちを、どう地元の草津の琵琶湖博物館に来ていただくかという仕掛けが必要だなというふうに考えます。

○篠原館長：ありがとうございます。

これも前回のときにも言いましたけれども、これを少しずつですけれども考えているのは、大人のディスカバリールームというのはもちろんですけども、先ほど言いましたように、大学生をターゲットにするということがあります。

もう1つは、先ほど言わなかったんですけども、御存じのように滋賀県というのは人口が170万人ですか。その中の製造業従事者、第二次産業の従事者が46%だというふうにいわれていて、大企業が大きな人数を抱えたわけですね。それで、企業の新人研修なり環境問題なりに、こういうところを利用できる方策はないのかということも模索していますけれども、なかなかこれがいろんな条件があつて、必ずしもすんなりとは

いかないと。

でも、考えなくてはならない一つの方策ではある。それは受けるほうの側の話ですけども、出向いていく話であれば、企業もターゲットにしながら、特に新人教育とか、そういうところではこれから博物館が果たす役割は大きいのではないかというふうに思っていますので、それも地道に少しずつ開いていきたいなというふうには考えております。折衝も実際は図ってはいるんですけども、すっとはいかないというのが現状で、第二次産業の従事者が46%の話ですね、もう少し積極的に取り組んでいくということは考えていきたいと思っています。

○市川議長：どうぞ。

○北島委員：ビジョン等について詳しい専門家ではないので、感想的な意見になって申しわけないと思います。私自身はこの博物館を校区にしている小学校に勤めておりまして、まずもって感謝します。最近も、ふれあい体験ということで、この学芸員さんが来てくださって授業を進めてくださいました。出張博物館だけじゃなくて、出前講座等でいろいろ関わってくださるというのがすごくありがたく思っています。

学びの話も出ましたけども、将来、大人になるということを考えて博物館で学習したことが楽しいので、もう一回来たいということは長期的には大切なことと思っているので、学ぶことが楽しいであったり、いろんな素材に出会って、自分の生活とか身の回りに触れるというのがすごく大切ななと思っています。

先ほど企画展示で見せていただいたニゴロブナも、本校では田植えしてから放流し、稲刈りして、できたお米を地域の人に買ってもらって義援金にするというような、一連の取り組みをさせていただいています。5年生は県内どこでも、「田んぼの学校」等はさせてもらっていますので、そういうところでの環境学習というのは進められているかと思っています。

子どもということについてですが、このビジョンの中で、コンセプトは多分、特にここを中心にというところで、今まで取り組んでこられたところは当たり前で挙がっていないのかなということを思いつつ、大人の日常的にということで、この中に子どもというのが余り出てこないというところを感じます。必然的に我々は総合的な学習の時間とか理科で行くので、ずっとあったらなと思いますけども、そういうところも視点として入れていただけるとありがたいです。

学校では、平成23年度から新しい学習指導要領になって、総合的な学習の時間が減りました。そういうこともあって、来館者数がこれからどうなるかというのが一定あるかと思います。それは先ほど委員がおっしゃったように、滋賀県の子どもはそんなに減らなくて、特に湖南のほうは増えて、草津の場合とかだったら新しい学校ができるぐらいです。多分ここに来る機会の子どもたちというか、対象者は増えているのかなと思っています。そういうプラス面とマイナス面がありますけども、先ほど言いました、学びというのが楽しい、環境学習が楽しいというところを、ぜひともまた続けていただけたらと思います。

私自身も教育研究会とあって、教職員の研究グループの中の、理科部会と環境部会の草津市の会長をさせてもらっていて、その中でも、この蜂屋先生とか来てくださって話とか、環境部会でのいろんな話をいただいているというのは、地道な経営といいますか、そういうのを進めていただけるとありがたいと思っています。

あと、生涯学習の話で、私は県の教育委員会にも9年ぐらいいた中で、生涯学習を担当させていただいて、先ほど言いました連携授業というのもすごくありがたいですし、県のほうでも地域の力がこうやって、いろんな方が関わってくださるといのは、全県でも進めていますし、草津市の場合は「地域協働合校」というので、独自で取り組みをしています。その中で、生涯学習という観点でいくと、3年前に、県民意識調査をさせていただいたときに、何を勉強したいかというところ、環境がトップだったんです。その辺、滋賀県ならではと思いますし、今どんどん高まっているので、そのニーズに対応するための博物館として、これから、ますます重点があるのかなと思っています。

その中で、基本構想を県で関わらせてもらったときのキーワードが、「まなぶ」「いかす」「つながる」ということだったので、ここに「交流」ということで入れてくださっているんで、ぜひとも、その学んだ方がいかせる場とか、つながる場というところも、今後必要ではないかなという気はしています。

また、博物館の職員講習に関わらせてもらって、教育普及活動が、博物館の大きなミッションとしてあると思いますし、いろんな学びのを支えていただけるとありがたいと思っています。

○市川議長：ありがとうございました。

小学生の数が減ってないので、すばらしいことだと思うんですが、全国的に見ると、

幼稚園バスがどんどん減って、デイサービスのバスのほうへどんどん増えている。今まで幼稚園バスが走っていた道を、デイサービスが走っているという状況が全国で起きているわけです。退職者、高年の方が、これからどんどん増えてくるわけで、高年の方にいかに来てもらえるかという水族館や博物館にしていかなきゃいけないのかなと思います。

はい、どうぞ。

○津屋委員：私は県内の学校支援をこの間ちょっとまとめたんですけど、この中に、やっぱり子どものキーワードがないわ。やはり入れてほしいと。当然入っていますよではなくて、未来を担う子どもたちにつないでほしいというメッセージが、この中に強く入れていただきたいと思う。こうしたところには大人ですけど、子どもは、要は受け身ではなくて、子どもが主役になるような、そういった取り組みがあってほしいです。

はしかけさんとかフィールドレポーターは全部、大人にくっついている子どもではなくて、子どもたちが大人たちに伝えていくような一歩踏み出していくというか、子どもでもすごくいろんなことができるので、そうした新たなところで大人のディスカバリールームが目立つんですけど、子どもの場をぜひお願いしたいなと思います。何せ人気があるところは、ほんとに子どもの体験プログラムとかに絶大な人気ですので、ぜひぜひお願いいたします。

ちょっと別なところで、お礼を申し上げたいことが1点ありまして、実はこの夏、福島県のいわき市のほうに被災地支援ということで、琵琶湖博物館のまさに環境センターの加藤さんと蜂屋先生が、ふだん琵琶湖博物館で構築された環境のプログラムを持って、一緒に行っていただきました。2日間で1,200名の親子が訪れましたが、唯一その琵琶湖博物館のコーナーが、琵琶湖のすばらしさ、琵琶湖とともに生活する。それを被災地で、これからどうやって生きていくお母さんたちの、ここでできたものを食べられないか、これをどう食べようと不安になることを、本当にすてきなメッセージを伝えてくださって、一緒にヨシ笛をつくって、ヨシ笛を吹いて、首にかけて帰られたんです。

いわき市の教育長さんがちょうどおいでになって、いわき市もたくさんあるんですけども、横横の連携がなくて、まだまだこれからという中で、非常に刺激を受けられて、帰られるときには、これから被災地の子どもたち、また文化施設ともっと連動して、こういうプログラムづくりをやっていきたいと、ぜひそれで滋賀県とさらに、いわゆる学

び合いをしたいというようなことで、来週また私がいわきのほう行きまして、学校の先生の学びの場を、それだけぜひ琵琶湖博物館の方に見ていただきたいなと思います。本当に日ごろやっていたらしゃることが、ぱっと被災地に行ったときに、見事にそれが熟成されていたのに本当に感動しました。

本当にご協力いただいております。また、さらにすごいなということを見発見しました。

これからも、よろしく。

○市川議長：はい、ありがとうございました。

まだまだご意見もあろうかと思いますが、この議題につきましては、このあたりにいたしたいと思います。

(3) 琵琶湖博物館中長期基本計画の実績および2012年度行動計画について、

○市川議長：引き続き、議題3、琵琶湖博物館中長期基本計画2011年度行動計画の実績および2012年度行動計画について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（藤村課長）：それでは、資料2に基づいてご説明をさせていただきます。

時間の関係で、中身全てはちょっと無理ですので、段階的な取り組みと実績、それを受けました次年度の活動計画ですが、計画の枠組みを中心にお話をさせていただきます。資料2のA4判の、琵琶湖博物館中長期計画の推進手順です。琵琶湖博物館では、中長期目標の「地域だれでも・どこでも博物館」を位置づけするために、平成14年に中長期基本計画を定めまして、段階的な取り組みを行っております。

まず、平成14年度から17年度、これを第一段階としまして、資料の活用や研究の推進など、基礎機能の強化に努めてきました。そして、平成18年度から22年度の5年間で、発展機能の強化として、琵琶湖への理解を深めて「湖と人間」の共存関係を築くため、体験と交流を促す活動に取り組んでいます。そして、平成23年度から27年度までの5年間、第3段階といたしまして、地域応援機能の強化に取り組んでいるところでありまして、対話と応援ができる機能を重点的に強化し、人々が地域に関心を持ち主体的に行動する地域社会の実現を目指しております。

そうした中、新琵琶湖博物館の創造が今回新しく加わり、目標とします「地域だれでも・どこでも博物館」の実現に向けまして、常設展示の再構築、交流空間の再構築、交

流機能の強化に取り組もうとしているところでございます。

中長期基本計画では、目標を達成するために、博物館機能の強化、そして環境の整備、2つの分野に分けまして、それぞれ基本方針を定めて段階的に取り組んでおります。

2ページ目をごらんいただきたいんですが、A3判の大変細かい表で見づらくて申しわけないんですが、一番左側に基本方針が定められております。例えば、博物館機能の強化では、資料が活用できる博物館、そして研究を進めて活かせる博物館等、5つの基本方針が一番左側にずっと掲げられております。

そして、5ページからは環境の整備ということで、拠点としての施設整備、柔軟な運営・組織等、4つの基本方針を定めております。

そして、A3の一枚目に戻っていただきたいんですが、右の下のほうにページ番号1と打っているものですが、例えば資料が活用できる博物館の部分でございまして、そこでは中長期基本計画が1段目にあって、2段目に実現方策および指標・目標値というふうに掲げておりますが、その1つ目のポツが、展示リニューアルを支える収蔵資料の充実と整備を進めていきますということで、その下に【指標・目標値】を具体的に定めまして、例えばこの資料ですと、データベースを新たに2分野の構築と公開をします。電子図鑑1件、目録1件の作成をしていきますというふうに具体的な数値目標をそれぞれの分野について定めております。

そして、右に移っていただきますと、第3段階（2011年度～2015年度）の活動計画ということで、いわゆる第3段階の5カ年で、どうした活動を、どこまでやっていくか、活動概要と達成目標が定められております。それを受けまして、さらに右に行ってくださいと、2011年度行動計画の実績・評価ということで、前年度の取り組みについて評価をしております。

例えば、上から4番目、一番幅の広い段を見ていただきますと、◎を打っている部分があります。ここにつきましては、目標としてデータベース、電子図鑑の構築、公開ができたということで、評価としては◎となっておりますが、欄外に評価というのがありまして、◎：大いに評価、○：まずまず評価、△：次年度に向けて対応策を検討、×：ほとんど評価できない、ということで、それぞれの事業についてこうした形で進行管理評価を実施しております。

こうした評価を受けまして、2012年度の行動計画ということで本年度の取り組み、

そして目標値、さらに計画的に、段階的に事業に取り組んでいるところでございます。
以上です。

○市川議長：ありがとうございました。

それでは、議題3、琵琶湖博物館中長期基本計画2011年度行動計画の実績及び、
2012年度行動計画について、ご議論いただきたいと思います。

ご質問、ご意見等、どなたからでも結構ですので、よろしくお願いいたします。

はい、どうぞ。

○前田委員：この「地域だれでも・どこでも博物館」と名前がついていたんですけど、中
身を知ったのはつい2週間ぐらい前でございます。私、はしかけとフィールドレポーター
の両方を活用している側の利用者ですけれども、この評価という、先ほど二重丸とか
おっしゃいましたが、この評価方法は、どなたがされているのでしょうか。

○事務局（藤村課長）：この評価については、まず館内で評価をしております。通常であ
れば、翌年度の協議会にかけてご報告をさせていただいて、意見をいただく。そうした
形で実施をしております。

○前田委員：それで、ここからちょっと問題発言をするかもしれませんが、実はフィール
ドレポーターのほうに二重丸がしてあるんですね。これは、私の実感とちょっと異なり
ます。といいますのは、先日、リニューアルに向けた会社の聞き取りの中でも、みんな
で話をしたんですけども、フィールドレポーター活動はちょっと行き詰まっていると
いう認識がございます。やっぱりいろんな問題があって、それを解決できずにいます。
その話し合いの中で気がついたことがあるのです。

ある人が、「私は博物館では楽しいことをやりたい。フィールドレポーターは楽しい
からやっている。けれども、最近、駆り出されることが多いから、それには参加したく
ない」とおっしゃるんですね。この駆り出されると非常に問題でして、つまりやらされ
る活動になっている。

で、これを解決するには、その人の意識を主体的なものにしてもらうということもあ
りますが、「だれでも・どこでも博物館」をこのように図っても、これはやっぱり上か
らの、ことしはあなたのところでやってあげましょうとか、やってくださいとかいう形
ではなかなか達成できないと思うんですね。

ということで、「だれでも・どこでも博物館」というのは、どのようにその対象を選

定して、そのあとのメンテナンスをどういうふうにされると考えていらっしゃるのか、そこをちょっと聞きたいんですが、お願いします。

○事務局（楠岡交流担当グループリーダー）：交流担当グループリーダーの楠岡と申します。

なかなか厳しいご意見をいただきましたけれど、フィールドレポーターの評価が二重丸になっていますのは、今まで湖西と北部地域などはどうしてもその回数が少なく、弱い地域で、そこでこの地域の活動している団体と連携を図れたという意味では、正直そういうふうになりました。

確におっしゃるとおり、例えば先日の「あさ、ひる、ばん」でも、はしかけの各グループ、フィールドレポーターさんにも、オープンハウスに、よろしかったらご参加くださいという言い方をしていたと思うんですけど、確かに博物館側から参加依頼というのは増えている傾向があるのかなと思います。

ただ、それを逆手にとっていただいて、せっかくやるんだから、もっと自分たちが楽しむと。せっかくこういうチャンスをどんどん使って、楽しんでやっていくというふうに考えてやっていただけると、参加する皆さんも、もっと楽しめるのではないかなと思います。

○前田委員：私も、そのように考えます。というのは、決まった後で、じゃ、何をしようと言うんじゃなくて、やる前から、じゃ、これをするから、しようじゃないかというのでは、大分取り組み方が違うと思いますので、かえって忙しくなるかもしれませんが、やはり少し早い段階で参加できる態勢があるといいかなと思います。

○市川議長：ほかに、何かございますでしょうか。

三角がついている項目は、前年度、前々年度はどうだったんでしょうか。

○事務局（藤村課長）：それぞれの項目によって異なっている部分はあるかなと思います。基本的には施設面のことであるとか、なかなか予算等の関係上進めることができないという、そうした課題もあることはあります。そうしたものにつきましては、やはり三角ということになってきております。

そうしたことも含めて、今後リニューアルでどう改めていくかということも、あわせて検討できるかなというふうに思っております。

○市川議長：ありがとうございました。

ほかに、何かございますでしょうか。

ございませんか。

それでは、この議題につきましては、このあたりにいたしたいと思います。

その他、何でも構いませんので、特にご発言があれば、よろしくお願いします。

はい、どうぞ。

○小田委員：先ほど市川会長のお話を聞いていまして、ここへ来る子どもたちも、大人も決して学習をしようとか、勉強をしようと思って来てない。やっぱり遊びに来るんですね。何かおもしろいものがあるんじゃないかと期待して。私の子どもも博物館へ来ると、まず、1階のディスカバリールームに入るんですね。で、そこでかなりの時間遊んでいます。じゃ、上も見ていこうかということで、上階を駆け足で回って、あと、魚を見て終わっちゃうんです。

そういう中で、今の大人のディスカバリールームというお話、これ、私はおもしろいなと思います。ディスカバリールームにあるザリガニの操作するやつですが、あれは私すごく好きでやりたいんですけど、いつも子どもがやっていて大人はできないんです。ああいう仕掛けをディスカバリールームだけにしないで、もっと展示全体に広げられないかなと思います。最初に遊ぶ要素があって、遊ぶところからおもしろいものが出てきて、そこから環境に対する感覚がいろいろと生まれてくると思うんです。

実際にここにいらっしゃる研究者の方も、恐らく自分がおもしろいなと思ったことを研究テーマにしておられると思うんですけども、博物館というのはそういう面白さを発展させる場所だと思うんです。ですから、いろいろ策定をされていると思うんですけど、今後考えていく中で、ディスカバリールームを大きく広げてほしいと思います。

もう一つは、そうやって子どもが連れてくる大人、30代、40代のお父さん、お母さんが、子育てが一段落したときに、ちょっと一人で行ってみようかなという気持ちが持てるような、もう一回戻ってきて何か勉強しようかなとか、遊ぼうかなという気持ちが持てるような、そういう仕組みが何か欲しいなと思います。それが人が集まってくる為のおもしろい仕組みなんじゃないかなと思います。以上です。

○廣畑委員：すみません。ずっと話をいろいろ聞かせていただいています、座っているだけで、しゃべらずに帰るとちょっとあかんと思ひまして、発言をさせていただきたいんです。

どちらかという、後の議題というか、さきの議題から何か全部つながってくる内容になると思います。今ご発言された小田委員さんの話とか、その前の市川会長さんのお話に通じるのかもわかりませんが、まず博物館とはつまる要素は何なんだろうということですけど、やっぱり1番には、学べる要素、学べる工夫があるかどうかだと思います。2つ目は、楽しめる要素、楽しめる工夫があるかどうか。3つ目は、遊べる要素、遊べる工夫があるかどうか。4つ目は、ためになる工夫があるかどうか。だと、僕はずっと話を聞いていて感じました。

そういう要素がそろると、人はどう思うかという、それは見せたい場所になるし、教えたい場所になるし、行きたい場所になるというふうに思うので、何かずっと今までいろいろな話があって、そのことはわかっているわということなのかもわからないですけど、そういう要素を一つ一つひもといていくと、やっぱり一つ一つのコーナーとか場所で、ちょっとした遊びとか、ちょっとした気づきとかいうようなことが体験的に得られるような、感覚的に得られるような創意とか工夫というものを講じていく必要があるのかなと思います。

じゃ、どうすればいいんだというアイデアはないですけど、例えば当社のしようもない事例で申しわけないですけど、今、電力事情で余り言えないので、やっていませんが、IHクッキングの商品になると、何をやっているかという、IHクッキングヒーターというのは磁力の力で水分をぐっとアップに加熱させるというのが、その調理器具として一番大きな特徴です。

ですから、来られたお客さんにIHの特徴って何ですかと言ったときに、じゃ、実際に体験してみてくださいということで、500ミリのお水を鉄の筒に入れて、IHのスイッチを入れます。それと同時に、あなたは、カップヌードルにお湯を注げるようにすぐ準備してくださいと、用意ドンでやります。やったら、カップヌードルのラップを抜いて、蓋をあけて、粉末をぱっと出して、カップヌードルにお湯を注ぐように準備をすると。そういう単純なことですけど、その準備をするよりも、お湯が沸騰するほうが速いんですね。単純なことですけど、すごく喜んでくれますし、それだけでIH調理器具の特徴というのもしっかり覚えてくれて、これは死ぬまで忘れませんと絶対言ってくれます。

ちょっとしたことですけど、ちょっとしたことを、それぞれのコーナーみたいなところ

ろで印象に残るようなこと、そんなものを何かやっていく必要性というのがあるのかなというふうに思います。ですから、さっきのザリガニのやつ、あれ僕もやっておもしろいですけど、ザリガニがどういうふうに餌をとっているかというのは、あれをやってみたら、ザリガニになった気分になりますから、大人とか子どもと関係なしに楽しいなど。ああいうのは、やっぱりゲームセンターにあるUFOキャッチャーみたいなやつがありますよね。ああいうふうな中に通ずるところがあるのかなというようなことを考えますし、いろんなところにそういった工夫をしていくヒントがあるのかなというようなことをちょっと感じました。とりとめないですけど。

○市川議長：ありがとうございます。

ほか、何かございますでしょうか。

はい、どうぞ。

○中田委員：私が今関わっております歴史回廊倶楽部というものは、県の生涯学習の機関である歴史回廊大学のOBでやっているんですけれども、まさに会社から卒業した方たち、その元気な方たちが多いわけなんです。年齢的にもそこそこの方、そして15年続いておりますから年齢的にも上がってきておまして、平均年齢70歳なんて言っているグループですけども、そこで主に歴史のことばかりやっていますから、お寺とか神社とか古墳とか、そういうところをうろうろしています。

そして、私がいつもそういうところに行って思うのは、やっぱり体験なんですよ。現場にいるのはすごくいいんですけども、じゃ、滋賀県の中で、どういう位置にあるのかというのはちょっとわからないんですよ。それで、特に2階の淀川流域の写真ですよ。あれを見ると、そうか、ここなのかということがすごくわかりますので、そういう年代の人を取り込むためにも、用田さんの古墳やら何やらですが、そういうものが体感できるような、例えばCGなんかであの上に照らすとか、そういうふうな体感できる場所をつくっていただけないかなと、実は具体的な話になってしまって申しわけないです。

あと、県外から来た人たちに、琵琶湖の生い立ちなんかをちょっと説明したこともあるんですけども、古琵琶湖層がずっと流れきたんだよというのを、そういうのがCGか何かで投影して行って、さっきのを見せていただいた企画展の中でも、サギのくちばしはこんな大きいんだというところもすごく感じましたので、ああいうふうな体感ができないかと。

それと、戦国時代が実は一番人気があるんです。安土の博物館のほうが管轄になるんでしょうけれども、滋賀県は道の国ということでいろんなコースをつくられて、東海道を歩くとか、中仙道を歩くとか、そういうのをずっと体感して歩いていらっしゃる方も多いわけなんですけど、その時代の琵琶湖なり、周りの地形なんかを体感できる場所がつかれるのは、ここぐらいじゃないかなと今考えていたんです。

それぞれにいろんなお話とか、江戸時代とかからでも必ず内湖の形とか、内地とか湿地とかすごく変わってきていますし、それから古墳時代なんか特に、どこまで湖岸が入ってきたかとか、そういうことが、あちこちの文献には少しずつ出ているんですが、全体としてわからないんですよ。そういうことをまとめていただけるのも、ここじゃないかと思うので、それをまた体で体感できる。本当に投影とかそういうのも結構ですから、そういうふうなことも、具体的な例で申しわけないですけど、考えていただけたらありがたいなと思います。

○市川議長：ありがとうございました。

体験の話が出たので。私がいつもよくする話ですが、カニに挟まれたら痛いんです。挟まれたことのない子は、目の前で誰かがカニに挟まれても、痛いだろうなという気がするけど、どれだけ痛いのかというのは実際にはわかりません。要するに、人の痛みとかいうのは自分の体験を通じて、あのときは痛かったなというのが脳みその中であって、ああ、痛いだろうなと思うわけです。やっぱり体験しておくというのは、いろんなことですごく大事ななと思います。

私は、観察会的时候会にドクダミの葉っぱを子どもたちにかがせます。臭せえという顔をしますけど、その草のことは二度と忘れません、覚えました。そういう体験をどれだけたくさん与えていくかというのが博物館の仕事でもあるんだなと思います。

時間もなくなってまいりましたので、本日の協議会は、このあたりで議論を終了したいと思います。

それでは、これもちまして、本日の議事を終了いたしたいと思います。長時間にわたり貴重なご意見をありがとうございました。

事務局に進行をお返しいたします。

4 閉 会

○兼房副館長：市川会長さん、ありがとうございます。

本当に長時間にわたりましてご議論いただきまして、ありがとうございます。

まことに貴重なご意見を頂戴いたしました。冒頭にも申し上げましたとおり、とりわけ新琵琶湖博物館創造ビジョンにつきましては、今、策定中でありまして、具体的にはこれからになります。きょうのご意見はもちろんでございますけれども、色々な機会をとらえて広く、ご意見を頂戴しながら進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

本日は、どうもありがとうございました。

[午後 4時28分 閉会]